

書評

「創価教育の源流」編纂委員会『評伝戸田城聖—創価教育の源流第2部』

松 井 慎 一 郎

「クリティカル・バイオグラフィ」の力作

創価大学創立50周年にあたる2021年、『評伝戸田城聖（下）』が発刊され、『評伝牧口常三郎』（2017年）、『評伝戸田城聖（上）』（2019年）と合わせて全3巻におよぶ『創価教育の源流』がここに完結した。月刊誌『第三文明』2013年1月号の連載以来、足掛け8年にわたり執筆の労をとられた編纂委員会の方々に、まずはお祝い申し上げたい。

かつて仏文学者の清水徹が英文学者の篠田一士に「クリティカル・バイオグラフィって何だい？」と質問した時、篠田は「資料を厳密に扱った伝記、それをクリティカル・バイオグラフィというんだ」と答えたという<sup>1</sup>。「執筆にあたっては、可能な限り実証的に記述して、注や参考資料は煩瑣をいとわずできるだけ詳細に掲載した」（上P1）、「目指したのは、近年見つかった多くの新資料をも考察し、牧口常三郎・戸田城聖・池田大作の三人に流れてきたものとは何かを探究すること」（下P524）という方針のもと、未公開のものを含め膨大な資料をその時代状況を踏まえながら丁寧に読み解き、戸田城聖という巨人の全体像を見事に浮かび上がらせた本書は、まさに、篠田のいう「クリティカル・バイオグラフィ」の力作と呼ぶにふさわしい。

本書は、戸田の青少年期や牧口常三郎との師弟関係を扱った上巻と、創価学会の再建・躍進および「不二の弟子」池田大作との共戦を扱った下巻から成り、前者は「第1章 志を抱いて」、「第2章 働きながら学ぶ」、「第3章 創価教育学会の創立」、「第4章 国家権力による弾圧」、後者は「第5章 学会組織の再建」、「第6章 後継の育成」、「第7章 願業を達成」という章立てで構成されている。

幼少期から青年期における足跡の明確化

日本近現代史を専攻する評者がまず注目したいのは、従来、明確ではなかった幼少期から青年期における戸田の足跡が鮮明になったことである。

これまでの伝記や年譜<sup>2</sup>によると、戸田が生誕地の石川県塩屋村から北海道厚田村へ移住した

---

Shinichiro Matsui（聖学院大学人文学部教授）

<sup>1</sup> 丸谷才一「伝記はなぜイギリスで繁栄したか」『考える人』No25、2008年8月、P38。

<sup>2</sup> たとえば、西野辰吉『戸田城聖伝』（第三文明社、1997年）や『偉大なる師弟の道 戸田城聖』（潮出版社、2000年）など。

のは、1902年のことで、それは一家総出のこととされてきた。しかし、本書では、姉てるの出生届や札幌地方法務局の建物閉鎖登記簿などを参考に、1898年に北前船の船乗りであった父甚七が寄港地の厚田村に寄留し、1903年には同村に家屋を購入した事実を明らかにし、『貳拾五周年記念 事業及人物』（東京電報通信社、1938年）の「幼少五歳の時厳父と共に北海道に渡り」との記述から、戸田の移住を1904年のこととしている（上P17）。

これまで青少年期の戸田の心境を語る資料は、1914年9月から1922年4月までの期間に断続的に記されていた手記<sup>3</sup>に限られていたが、本書では、厚田小学校の恩師で詩人であった支部貞助らが創刊した文芸同人誌『囁き』の存在を発見し、同誌第4号（1918年5月）から第12号（1919年2月）まで（第9号を除く）、戸田が「桜桃」や「あかん坊」の筆名で投稿している文章を確認し紹介している（上P97～100）。同誌第11号（1919年1月）に投稿されたエッセー「きかれましたら答へたい」には、「生きて居て楽しいかときかれましたら、楽しいと答へたい。なぜかときかれましたら苦勞を時々するからだ、と答へたい」と記されており、「われわれは、ほんとうは、楽しむために生まれてきたのである。おしるこに少量の塩を加えて甘みを増すごとく、苦しみがあるから楽しめる<sup>4</sup>」という後年の「絶対的幸福」観の萌芽をすでに見ることができるのである。

また、戸田の生涯において決定的ともいえる恩師牧口常三郎との出会いに関しても、従来の伝記や年譜では、1920年4月のこととしてきたが、本書では、戸田と同じ頃に牧口の面接を受けて西町尋常小学校訓導となった窪田正隆の手記と弟宛の書簡（1920年2月3日付）に基づき、1920年1月と推測しているのである（上P124）。

### 創価教育学会創立前後について

そして、創価教育学会創立前後の状況についても、様々な資料を渉猟して新たな歴史的事実を明らかにしている。牧口と戸田の師弟が日蓮仏法に帰依するのは1928年のことであるが、それ以前の宗教遍歴にも触れている。特に注目すべきは、戸田が牧口に連れられて、たびたび古神道の宗教団体・稜威会による禊に参加していることである。稜威会の機関紙『大日本世界教』や関係者の聞書を参考に、少なくとも、1925年8月、1927年8月、1928年8月の3度にわたって、北軽井沢で開催された禊の会に参加していた事実を明らかにしている（上P179、P191）。本書は、当時結核を患っていた戸田の健康回復をはかろうとした牧口の配慮によるものとし（上巻P180）、信仰とは関係のなかったものとして扱っている<sup>5</sup>。

稜威会と牧口の関係については、今後の研究の進展に期待したいが、評者が調査したところによれば、牧口は、稜威会の創立者であった古神道家の川面凡児の死去にさいして、近親者などが集った「納棺祭」（1929年2月）、37名の友人が集った「追慕会」（1929年4月）に参加してい

<sup>3</sup> 戸田城聖『若き日の手記・獄中記』（青娥書房、1970年）に所収。

<sup>4</sup> 戸田城聖「絶対的幸福をうる道」1953年9月、『戸田城聖全集』第4巻、聖教新聞社、1984年、P78。

<sup>5</sup> 『評伝牧口常三郎』は、牧口自身が禊に参加した理由を「健康のため」と解釈している。「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝牧口常三郎—創価教育の源流第1部』第三文明社、2017年、P270。

た<sup>6</sup>。北軽井沢の禊についても、1927年8月の参加時には、時習学館の児童生徒14名を引き連れて参加している<sup>7</sup>。稜威会による禊の行事は、祓や禊の行だけでなく、それを終えたら「振魂」という行法を行うものであった。具体的には、掌を十字に組み、瞑目して渾身の力をこめて組んだ手を振り動かすと同時に、「伊吹」と呼ばれる呼吸法を行い、午前3回、正午1回、午後3回の計7度にわたって実施する。しかも1回のセッションに要する時間は1時間30分から2時間ほどで休息の時間はほとんどない。しかも行のあいだ、食事は5勺ないし1合の粥を1日2回（午前9～10時頃と午後5～6時頃）食べるほかは、白湯以外の飲食は一切禁止であった<sup>8</sup>。絶食に近い状態で激しい運動を一週間繰り返すという「荒行」に、病んでいる戸田や多数の児童生徒まで引き連れてた牧口が、単純に健康維持・回復のために参加したとは考えにくい。

詳細は別の機会に譲ることとするが、評者は、牧口が「祖神の垂示」とよばれる川面凡児の古神道に思想的な関心も寄せていたのではないかと考える<sup>9</sup>。宗教は個人の精神的平安をもたらすだけでなく、社会全体をも幸福安寧に導くものでなければならぬとし、優れた宗教を有する国家が信仰の上で世界を席卷し人類に平和をもたらすと考える川面は、世界の諸宗教・思想との緻密な比較研究を通じて、古神道こそ道義的精神面で世界に冠たる宗教・思想であると主張した<sup>10</sup>。世界各国は武力でも経済力でもなく、それぞれの信仰の優劣によって競争し、その勝者が「世界的盟主」になるという川面の「信仰的競争」論は、かつて大著『人生地理学』において「人道的競争」の到来を思い描いていた牧口に大きな示唆を与えるものであったと推測できるのである。牧口は、1929年2月の川面の死去を前後に稜威会を離れ、前年に三谷素啓を通じて出会った日蓮仏法に深入りしていくことになったのであろう。そのことは、『新教』第6巻第4号（1936年4月）の「創価教育学会宗教革命教団報告」中の「吾々の宗教革命団体の起原は昭和四年春、創価教育学体系の第一巻の起稿以前にある」（上P302）との記述とも符合するものである。禊をはじめとする行法と体系的な神学理論を重視する川面の「祖神の垂示」は、信行学の実践を説く日蓮仏法との間で何らかの共通点があったと想定することもできる。ただし、牧口は最終的には古神道ではなく日蓮仏法を選択した。人間を「天之御中主太神」の分魂の「現神」とし、その神霊を顕すために禊をはじめとする行法を行う「祖神の垂示」と、各人が唱題・折伏行によって仏界を顕出し、やがて仏国土を建設するという日蓮仏法との間の、共通点や差異性は興味深いテーマであり、今後の検討が俟たれる。

川面が死去した1929年は、戸田の人生にとっても画期となる年であった。経営する時習学館は、

<sup>6</sup> 『大日本世界教』第22巻第3・4号、1929年4月、P28、P151。

<sup>7</sup> 『大日本世界教』第20巻第9号、1927年9月、P20。

<sup>8</sup> 藤巻一保『天皇の秘教』学研、2009年、P204～205。

<sup>9</sup> 牧口と川面との関係について、評者はすでに、東洋哲学研究所研究部員会（2021年1月19日）にて「川面凡児と牧口常三郎—「信仰的競争」と「人道的競争」と題する報告を行っている。

<sup>10</sup> 川面の神道に関する著作は膨大な数に及び、その大半が専門的で難解な文で綴られている。比較的、明解で客観性を有し、その宗教論の特徴を示した著書として、『社会組織の根本原理』（稜威会出版部、1921年）をあげることができる。川面の神道思想を論じた最近の研究に、神杉靖嗣「『大日本世界教稜威会』川面凡児の神道思想」（阪本是丸編『近代の神道と社会』弘文堂、2020年）がある。

激しい受験競争という世相のなかで大きく発展、塾舎は3階建に増改築され、中等学校進学希望者のための模擬試験は外部にも広げられ、青山会館大講堂で行われるまでになった（上 P206～210）、また、その年の12月には、初めての著書となる『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（城文堂）も出版している（上 P199）。この本の序の執筆者は、中央大学学長を務めていた馬場愿治であった。当時、戸田が中央大学本科経済学部在籍していたことからすれば特筆すべき事柄ではないかもしれないが、馬場が当時稜威会の会長であった事実を考えると、そこには大学内の単なる師弟関係に止まらないものが存在していたように思える<sup>11</sup>。1930年3月における戸田の中央大学中退の理由について、本書では、牧口の『創価教育学体系』の出版に専心しようとしたためと推測している（上 P229）が、それに加えて、牧口と共に稜威会を離れ日蓮仏法に専心していったという事実が関係していたと考えるのは、穿ち過ぎであろうか。1930年6月に出版された戸田の『推理式指導算術』では、序の執筆者は牧口になっている。いずれにしても、日蓮仏法との出会いから『創価教育学体系』出版にいたるまでの牧口と戸田の動向については不明な点が多く、今後の研究の進展に期待したい。

### 「民衆の味方」としての実像

本書は、創価教育学会が日蓮仏法を根本とした宗教運動を本格的に展開するようになっていた頃から、戸田が出版業をはじめとする様々な事業を展開していった様子を詳細に辿り、1941年には、一流実業家の証とでもいえる「交詢社」社員になった事実を明らかにしている（上 P338）。そして、戸田がそのように積極的に事業に乗り出していった理由として、創価教育学会の活動を支えるとともに、創価教育学に基づいた学校の設立という牧口の構想を実現するために財政基盤の確立が欠かせないと考えたからではないかと推測している（上 P338）。こうした推測は、広宣流布という牧口の遺志を引き継ぎ、学会再建のために通信教育や出版事業を始めた戦後の戸田の動向とも一致するものであり、極めて正当な分析といえるだろう。民衆救済という観点に立った牧口と戸田の師弟関係を理解せずに、戸田城聖という人物の実像は解明できない。戸田が生来の俗人で、戦後、創価学会を「事業の代替物」「集金マシン」とみなして発展させていったとする最近の評価<sup>12</sup>への痛烈な批判にもなっている。

下巻は、戦後、創価学会を再建し、青年育成と民衆救済に全力を注いだ戸田の足跡を、多くの資料に基づいて明らかにしている。「実業家」や「宗教家」といった定型的な枠にあてはまらない民衆救済者としての実像を、「戸田先生は権力にも権威にもこびず、貧しい人の、苦勞している民衆の味方でした。庶民の足下の問題を、膝をまじえつつ語り合う時、路地から路地へと一軒

<sup>11</sup> 「創価教育の源流」編纂委員会の中心メンバーである塩原將行氏は、もともと馬場と交友のあった牧口が戸田に勧めて馬場に序を書いてもらうように依頼したのではないかと推測している。また、戸田が自序を書いてから出版まで半年のブランクがあることから、馬場の序の執筆が大幅に遅れ、それは牧口・戸田の師弟と馬場との間に何か疎遠になることがあったのではないかと推測している。塩原將行「戸田城外著『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』、『創価教育』第3号、2010年3月、P216～217。

<sup>12</sup> 高橋篤史『創価学会秘史』講談社、2018年、P234。

一軒、訪ねている時が、最もうれしそうでした」という池田大作の証言等を交えながら、鮮やかに浮かび上がらせることに成功している。

政界進出の際に「国立戒壇」建立を主張したことから、戸田も宗門同様、「広宣流布＝国立戒壇」という考えを持っていたのではと誤解されることが多いが、本書は、会長に就任した1951年5月に福岡県在住の田中国之に宛てた書簡中の「広宣流布と言へば人皆国立戒壇の建立と目指します。そして政治家より権力者に頼って戒壇建立を考へる愚者があります。そんな考へ方の者を馬鹿と言ふので御座います。(中略)化儀の広宣流布は御本尊流布以外にないのです」という文章を紹介し、そうした誤解を一蹴している(下P154～155)。

戸田の実像を明らかにすることは、そのまま創価学会の実像を明らかにすることでもある。そうした意味では、本書が、創価学会研究という視点からも重要であることは疑う余地がない。佐藤優『池田大作研究』(朝日新聞出版、2020年)の出版や世界各地の学術機関における「池田大作研究所」あるいは「池田大作研究会」の設置<sup>13</sup>に象徴されるように、昨今、アカデミズムの立場から本格的な池田研究の動きが活発になりつつある。池田研究という点でも恩師戸田城聖の実像を伝える本書の刊行は誠に意義深いものであり、今後、創価学会および池田大作研究における基本文献としての命脈を保っていくものと信ずる。

(第三文明社、上2019年、下2021年)

---

<sup>13</sup> 中国では今世紀に入ってから、池田思想研究が大きく進展し、これまで44の大学・研究期間に「池田思想研究機関」が設置され、全国規模の学術シンポジウムも10回にわたって行われたという。汪鴻祥『「価値創造」の道—いま、中国で広がる「池田思想」研究』鳳書院、2021年、P34。